

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しないが、以下のように可能な限り外国語によるコミュニケーション力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り]」, [発表]」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。
- 問題は、高等学校学習指導要領「外国語」の目標及び内容等に対応したものとし、CEFR等を参考に作成する。

また、大学教育を受けるために必要な能力を把握できる問題とするが、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるようにする。

2 各問題の出題意図と解答結果

令和8年度共通テストにおいては、「令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」にのっとり、高等学校でドイツ語を学んだ受験者の基本的能力を正確に把握することを目標とした。「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り]」, [発表]」・「書くこと」の統合的な言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や意見を整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断する力を多面的に評価することを心掛けた。また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。

作問に当たっては、高等学校ドイツ語担当教員や日本独文学会ドイツ語教育部会の意見を参考にし、過去の共通テストの分析も手掛かりにして、問題の難易度を適正に保つことを心掛けた。出題語彙の範囲については、各種独和辞典の重要語彙、CEFRの語彙リストを参照し、受験者に過度の負担がかからぬように配慮した。

試験全体の構成は、これまでの形式にとらわれることなく、第1問で文法・語彙の基本的な知識を、第2問で作文能力を、第3問で日常的なコミュニケーション場面における基本的な言語知識を、第4問でインタビューなどから情報を集めて整理・発表する能力を、第5問でデータや文章から必要な情報を選び出す能力を、第6問でテキストから論理的展開を読み取る能力を問う作問を目指した。

設問数と配点については、文法2問11題33点、作文3問6題18点、コミュニケーション7問8題40点、整理・発表5問8題30点、データ読み取り6問7題35点、長文読解6問8題44点とし、全体の設問数は29問、解答数は48題である。

上記の基本方針を踏まえ、各問題は、次のような意図に基づき出題されている。

第1問：基本的な文法知識及び語彙力の習熟度を問う。

第2問：基本的な文法知識に基づく、文の運用能力を問う。

第3問：会話の内容を総体的に捉え、日常会話で用いられる基本的な表現の理解を問う。

第4問：複数のソースから情報を収集し、それを整理し発表につなげる能力を問う。

第5問：文章や、それに関するデータから必要な情報を選び出す能力を問う。

第6問：比較的分量のある文章を読み、その概要・要点、論理展開等を把握する能力を問う。

今回の平均点は109.87点（100点満点換算値：54.93点）で、昨年の127.24点よりも大きく下がってしまった。各問題の設問数、配点及び得点率は次のとおりである。

発音・文法	第1問	2問	33点	54.81%
	第2問	3問	18点	59.29%
会話・コミュニケーション	第3問	7問	40点	50.84%
	第4問	5問	30点	57.31%
読解	第5問	6問	35点	65.80%
	第6問	6問	44点	46.70%

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

出題に用いたドイツ語の総語数と総語彙数に関して、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という）からは、「ドイツ語総語数（のべ語数）は2,576語（固有名詞を入れると2,830語）であり、昨年度の2,364語から210語増加した。これに対し、総語彙数（単一語の初出回数）は678語で、昨年度（730語）より52語減少している。このことから、限られた語彙の範囲内で、より多くのテキストを素早く、かつ正確に読み解く力が求められる傾向が強まっていることがわかる。一方で、読解量の増加は、試験時間内での処理を相対的に困難にし、それが平均点の低下につながった可能性がある。」とのコメントがあり、同時に難易度の高い語彙については「やや難度が高いと思われる語の数は11語であった。（…）総語彙数が増加しているにもかかわらず、むしろ難語は11語程度に抑えられている。全体的には基本的語彙あるいはそれらを組み合わせた合成語や派生語であり、それぞれの形態素の意味からある程度の意味を推測することができる語彙が多い。また、難度が高い語にはあらかじめ注やイラストを施すことで結果的に受験者の負担に配慮した工夫が見られ、難度が不必要に高くないよう配慮した出題であったと評価できる。」との評価を得た。また、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という）からは、「昨年度、大幅に出題傾向が変更になったことと比較すると、出題形式に特に驚きはなかった。以前あった発音・アクセントに関する知識を問う出題は継続して出題されていない。また、昨年度この場で述べた表記等については改善されている。昨年度同様に、特定の場面や状況に応じた会話や長文など、受験者には今まで以上に幅広く学び正確な知識が求められる出題である。」というコメントを頂いた。

設問構成と出題形式については、「思考力・判断力・表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。全体的な出題形式について、教科担当教員からは、「共通テスト『ドイツ語』にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短を身に着ける意識を持たせるためにも発音に関する出題があってもいいと思う。試験の出題にあるだけで、発音を重点的に教えることができる。」というコメントと要望を頂いた。また、設問のテーマに関して、ドイツ語教育部会からは「特に、身近な話題に加えて社会・文化的内容を扱う長文が配置されている点が特徴的である。これらの構成は、現行の学習指導要領が掲げる「言語活動を通して情報を的確に理解し活用する力」を測るという観点にも合致していると考えられる。」という評価を頂いた。教科担当委員、ドイツ語教育部会から頂いた評価

・要望を踏まえ、今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

第1問は主として基礎的な文法、語彙の知識を問う問題である。昨年度に引き続き、新教育課程に対応した問題形式にした。各問を個別の選択問題ではなく、テキストの中に配置することにより、文法や語彙の知識のみならず、文脈に応じた適切な表現を問うている。ドイツ語教育部会からは「受験者に馴染みのあるテーマを採用したことで、全体として昨年度よりも解きやすくなったという印象を受ける。現行の学習指導要領に即した出題形式を採用することで、実用的なドイツ語を問うことを可能にし、受験者のドイツ語能力を適切に測るという目的を達成しているという意味においても、好意的に評価できる」と評価された。教科担当委員からは「本文の文脈が解答に与える影響は少ない」とのコメントを頂いたが、これについては検討課題としたい。

第2問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な表現の知識を問うている。昨年度に引き続き、今年度も完答問題を採用せず、部分点を認めている。ドイツ語教育部会からは「全体として、出題されている語彙の難度は高くない。また、各設問を解くことにより学習者の文法知識の差異を測るという意図は妥当であると評価できる」との評価を得た。

第3問は、ドイツ人女性2人が、そのうちの1人のボーイフレンドが日本に滞在している様子を知り、彼を訪ねようと日本旅行の計画を話し合っている会話文を読み、設問に答える問題である。日本での様子をイラストで示したり、旅程表を出したりすることによって、比較的分量のあるテキストでも話の流れがイメージしやすくなるよう工夫した。教科担当教員からは、題材に関して「日本での旅行がテーマとなっているので、場面の想像はしやすい。」とのコメントをもらった。ドイツ語教育部会からも「高校生にも想像しやすいテーマが取り上げられている」と評価された。問題の解きやすさに関しては、ドイツ語教育部会から「会話文を丁寧に読む必要がある」ものの「会話文を丁寧に追っていけば正答を導くことができる」との評があったが、教科担当教員からは、「使用語数が全設問の中で最も多く、設問に答えるためにページを何度も行き来する必要があり、解くのに非常に時間を要する」と改善点を指摘された。

第4問は、Thomasが芸術家に金継ぎについてインタビューするという内容になっている。その後、会話文をメモにまとめ、かつプレゼンテーションを行うという形式は、前年度を踏襲している。ドイツ語教育部会からは、「情報を取捨選択し、要約する能力を問う出題形式である」と評価していただいた。テーマの設定については、教科担当教員から「事前の知識の差が理解度の差につながる可能性がある」との意見があった。しかしながら、昨年度と比較すると得点率は上昇しており、予備知識の有無は大きな問題とならなかったと思われる。また、今回新たな試みとして取り入れたスライドの選択問題は、高校生にとって身近であると教科担当教員が評価する一方、ドイツ語教育部会は「発表をドイツ語で構成するための知識や技能が前提とされており、そういった機会が少ない学習者にとっては難度が高い問題だった可能性がある」との意見だった。全体的な評価としては、「そもそも筆記試験においてプレゼンテーションの力を測ることができるのか」という根本的な問題を抱えているとの意見であった。問題作成部会としても、まだ試行錯誤を繰り返しており、形式については不断に考慮することが課題である。

第5問では、テキスト資料（記事）一つとグラフ資料（資料1・資料2）二つのそれぞれを正確に理解できるか、グラフの数値のドイツ語での表現を正確に読み取れるか、資料三つから全体のテーマを理解できるかを問う問題を作成した。設問では、テキスト資料および個々のグラフの理解、三つの資料を比較して理解することを求める問題を作成した。テーマはドイツ人の余暇の過ごし方で、2019年から2024年までの余暇の過ごし方における実情を示す資料と2024年時点での余暇につい

ての希望を示す資料を選んだ。主たる傾向はメディア利用の増大であり、受験者にとっても身近な問題と考えられる。

問題に対する全体的な評価として、ドイツ語教育部会からは、受験者にとって身近なメディア利用の変遷が主たるテーマであり、予備知識がなくても理解できる点を評価するコメントがあった。問題形式について、科目担当教員からは、グラフが本文の補助資料ではなく、設問回答のためにグラフを個別に読み取る必要があり取り組みにくいとの指摘があった。一方ドイツ語教育部会からは、テキストとグラフを比較しながら解答するという方式が昨年度からの新しい出題傾向の踏襲と認めるコメントがあった。問3についてはカテゴリー分けに曖昧さがあると教科担当教員から指摘があったが、ドイツ語教育部会からは正答以外の選択肢の中で迷う余地は少なく比較的容易とのコメントがあった。問5については教科担当教員とドイツ語教育部会双方から、一般常識と照らして正答を導き出せるのではないかと指摘があった。問6については、科目担当教員から読まねばならないドイツ語分量が多すぎることで、設問が少々不明確であるとの指摘があった。ドイツ語教育部会からも問題の指示がやや曖昧との指摘があったが、正答には問題なく行きつけるとのコメントがあった。設問に該当する箇所だけでなく、示された資料全体の主旨を捉えた総合的な理解は読解問題において非常に重要であり、特に問6ではその点を問うた。

第6問では、比較的分量のある記事を読み、その概要・要点、論理展開、書き手の意見等を把握する能力を問う問題を作成した。6問のうち4問は選択肢をドイツ語にすることで、ドイツ語での表現を正確に読み取ることも前提としている。テキストは心理カウンセラーの立場から書かれた記事をもとにしており、対立や争いとうどう向き合うべきかという、近年ドイツ語圏でテーマになりやすい人間関係の問題を扱っており、他者理解、異文化理解へとつながるものを選択した。問題作成に当たっては可能な限り難解な表現は避け、日本語による注を三つ加えたほか、文中・設問等で比較的レベルの高い表現が出てくる際には、文脈など他の要素で判断できるように配慮した。本文の難度について、ドイツ語教育部会からは「特に目立って難解な文構造や難語は含まれておらず、スムーズに読めるテキストである」と評価されている一方で、教科担当教員からは「抽象的な概念・内容について説明をしているので使用語彙や言い回しが難しいと感じた」との指摘があったほか、話題の展開の複雑性、および全体の時間配分の関係で第6問に割く時間が少なくなる可能性について言及があった。問題についてもドイツ語教育部会からは、全体的に難度は適切であり良問であるとの評価がなされたが、教科担当教員からは「やや難」、「難しい」など全般的に難度が高いとの評価がなされている。こうした指摘をふまえて、語彙・表現レベルの設定を今後の課題とし、試験全体の時間配分との関係性についても引き続き検討していきたい。全体の得点率は約46.7%であった。昨年度の得点率が67.5%であったことから、難易度に関しては難化したと言える一方で、先述の通り、その原因が時間不足であるとも考えられるため、試験全体のバランスについても目配りしていく必要があるだろう。

4 まとめ

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成部会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、良問の作成に向けて更に努力を続けていく所存である。なお、過去10年間の本試験の受験者数・平均点(100点満点換算)の推移は以下のとおりである。

年度	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
受験者数	116	109	118	116	109	108	82	101	96	104
平均点	64.33	68.42	76.10	73.95	59.62	62.13	61.90	65.47	63.62	54.93